

【漁況】 【マアジ】

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しました。平成11年には大きく減少し21万1千トンとなりましたが、その後ほぼ横ばいで、平成17年は19万4千トンでした。

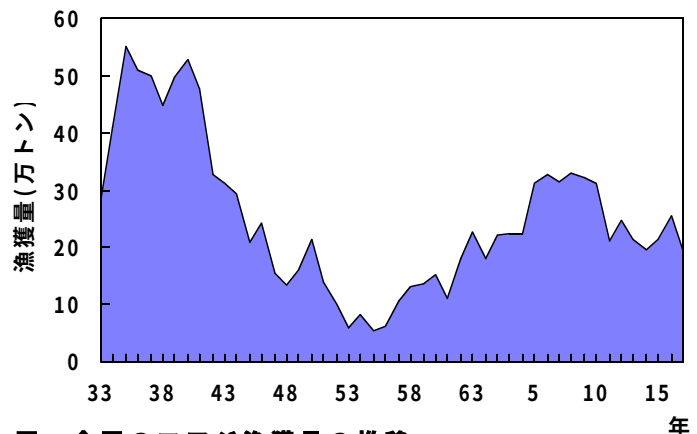


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成19年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、長島沖から串木野沖にかけて漁場が形成されました。

薩南海域では、開聞沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、アジ仔（0歳魚・平成19年生まれ）及び豆・小アジ（1歳魚・平成18年生まれ）主体に289トンの水揚げで、前年の46%及び平年の37%でした。

3. 平成19年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、アジ仔・豆アジ（0歳魚・平成19年生まれ）及びマアジ小・中（1歳魚）でしょう。

来遊量は、前年・平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ0歳魚は、現在までの定置網やまき網での漁獲状況から、前年、平年を下回る水準であると考えられます。

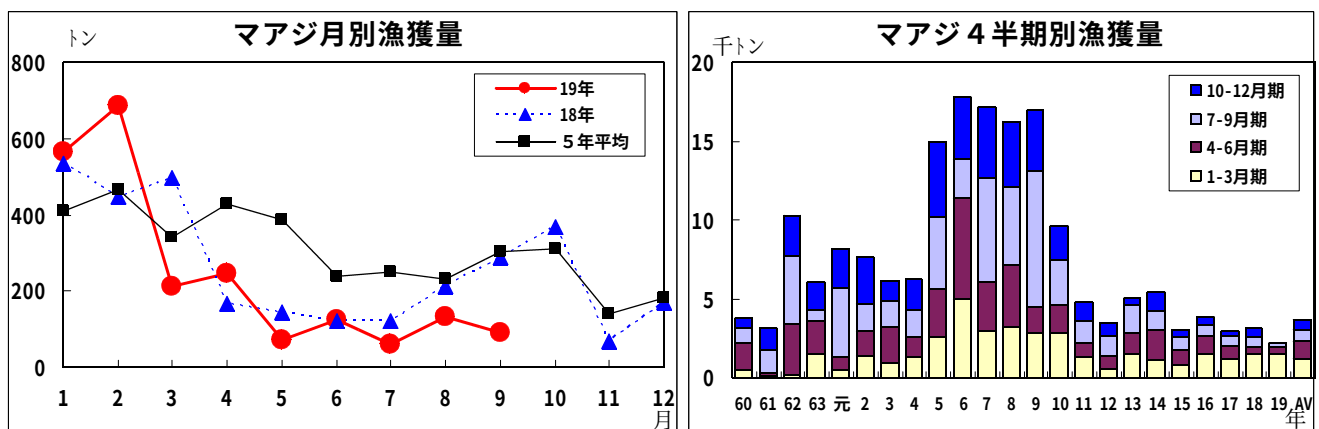


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値、平成19年9月26日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、平成14年は27万9千トンに減少した後、増加し平成17年は60万4千トンでした。

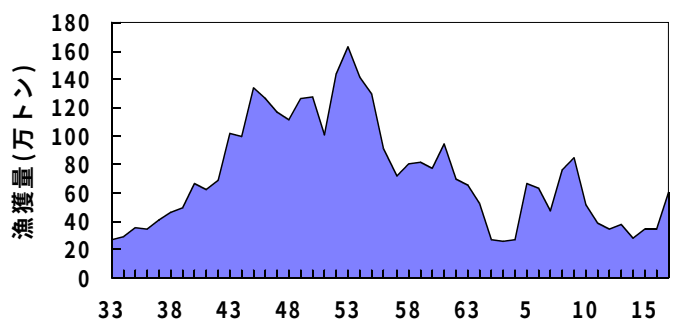


図 全国のサバ類漁獲量の推移

2. 平成19年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甕東から串木野沖にかけて漁場が形成されました。

薩南海域では、枕崎沖・竹島・湯瀬・宇治周辺が主漁場となった。

4港計では、7月はゴマサバ中・中小(3歳魚・2歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ)主体、8月からはゴマサバ豆（0歳魚・平成18年生まれ）主体に2,696トンの水揚げで、前年の54%及び平年の61%でした。

3. 平成19年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ豆（0歳魚・平成19年生まれ）主体でゴマサバ中小・中（1歳魚・2歳魚）も漁獲されるでしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ1歳魚、2歳魚は、前期までの漁況から来遊量が非常に低い水準で推移すると考えられます。

ゴマサバ0歳魚は、前期に北薩海域及び薩南海域で好調な来遊が見られたことから今後も好調に推移すると考えられます。

総合的にみて前年・平年を下回ると考えられます。

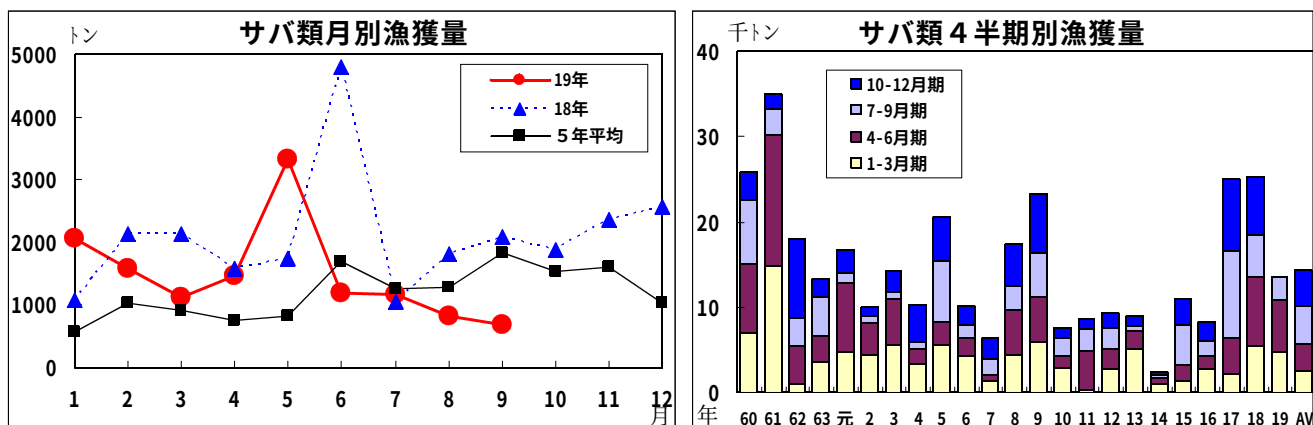


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値、平成19年9月26日までの水揚量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成17年は2万8千トンでした。

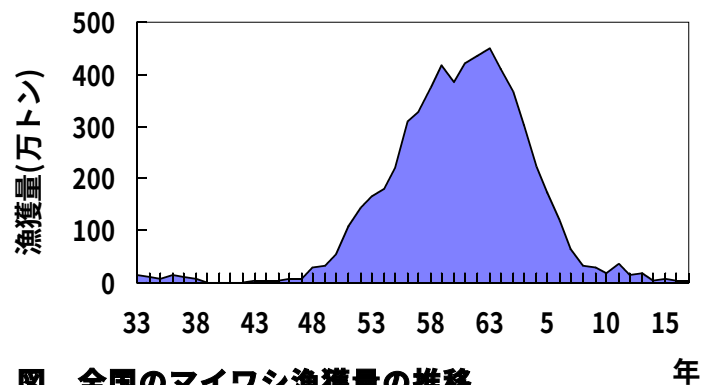


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 平成19年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

期間中西薩海域から薩南海域にかけてまとまった来遊が見られ、鹿児島県4港のまき網で中羽主体に778.7トン(前年比180,260%, 平年比62,158%)と前年・平年とも大きく上回りました。北薩海域の棒受網では64.9トン(前年比3,621%, 平年比3,342%)と、前年・平年とも大きく上回りました。

3. 平成19年10～12月期の見とおし

まき網、棒受網とも小～中羽銘柄(0歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

(根 拠)

マイワシ資源は全国的に依然として低水準にあるものの、北薩海域の棒受網で0歳魚（平成18年生まれ）の水揚げが散発的に続いており、今後もこの傾向が続くと考えられます。

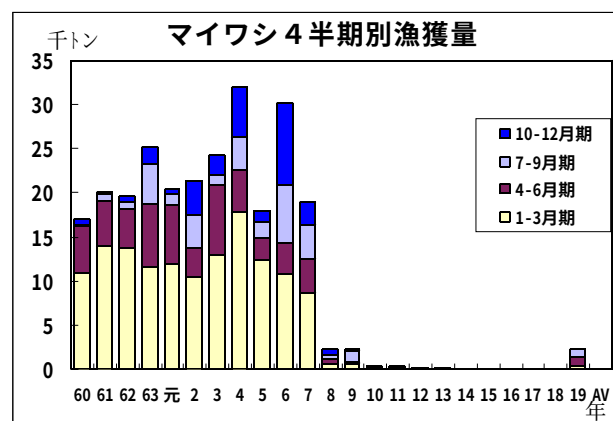
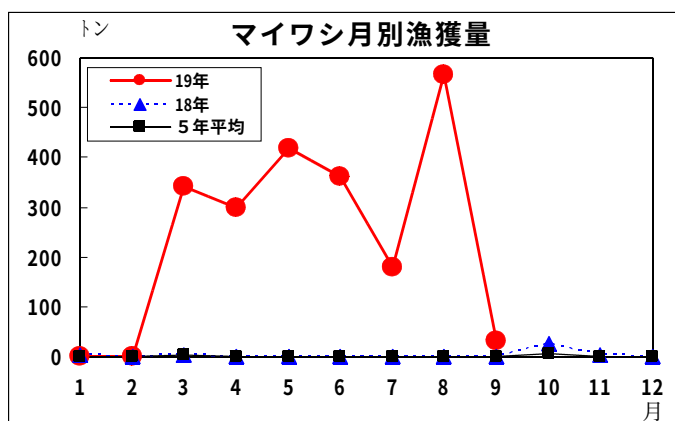


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値、平成19年9月26日までの水揚げ量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トン、平成17年は3万5千トンでした。

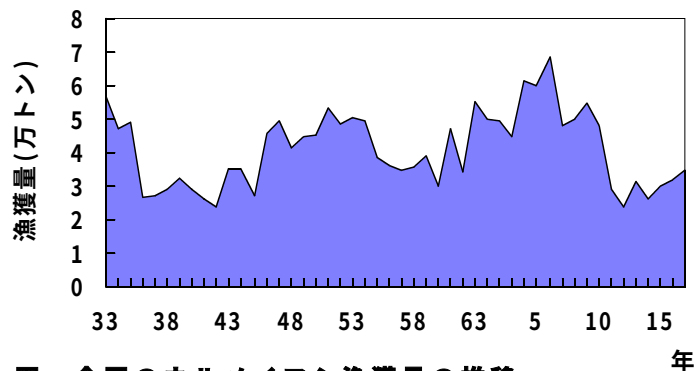


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成19年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

期間中西薩海域から薩南海域にかけてまとまった来遊が見られました。鹿児島県4港のまき網で1,559.4トン(前年比671%, 平年比447%)と、前年・平年を大きく上回りました。北薩海域の棒受網では830.3トン(前年比155%, 平年比160%)と、前年・平年を大きく上回りました。

まき網・棒受網とも0歳魚の中羽銘柄が漁獲の主体で、好調に推移しています。

3. 平成19年10～12月期の見とおし

まき網・北薩海域の棒受網とも中羽銘柄(0歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

(根 拠)

今期の漁獲の主体となる0歳魚（平成19年生まれ）の水揚げが好調に推移しており、来遊水準は高いと考えられます。

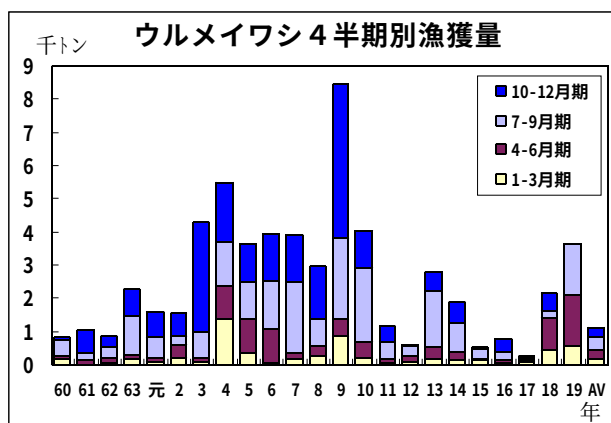
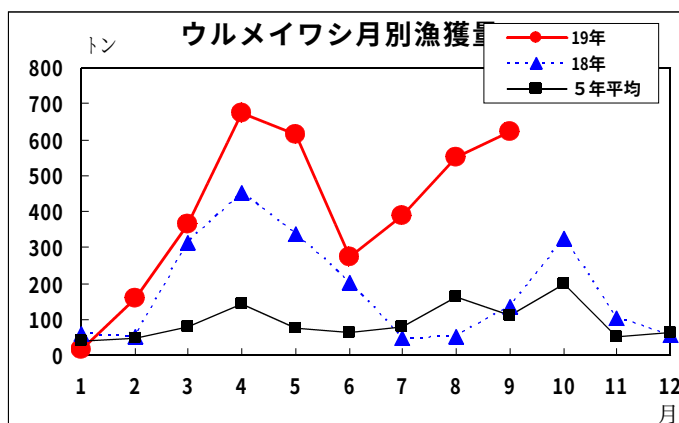


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年9月26日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、平成17年は再び大きく減少し、34万7千トンとなりました。

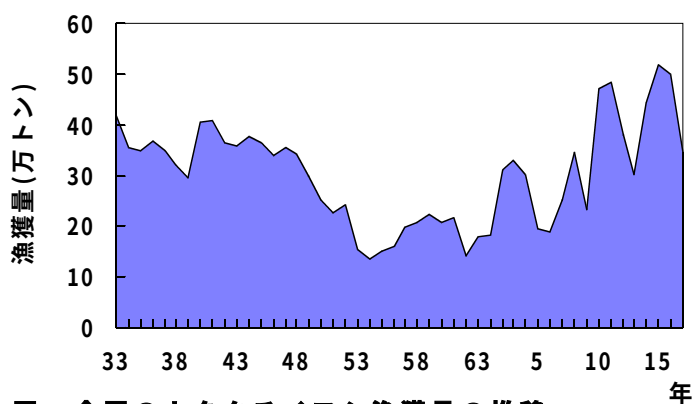


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成19年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

期間中、北薩海域の沿岸域に漁場が形成されました。鹿児島県4港のまき網で628.6トン(前年比259%, 平年比482%)の水揚げで、前年・平年を大きく上回りました。北薩海域の棒受網でも384.3トン（前年比237%, 平年比289%）の水揚げで、前年・平年を大きく上回りました。

北薩海域の棒受網では中羽銘柄（0歳魚 平成19年生まれ）を主体に好調な水揚げが続いています。

3. 平成19年10～12月期の見とおし

中羽銘柄(0歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体で、前年・平年を上回るでしょう。

（根 拠）

まき網・棒受網とも中羽銘柄（0歳魚 平成19年生まれ）を主体に好調に推移していることから、来遊水準は高いと考えられます。

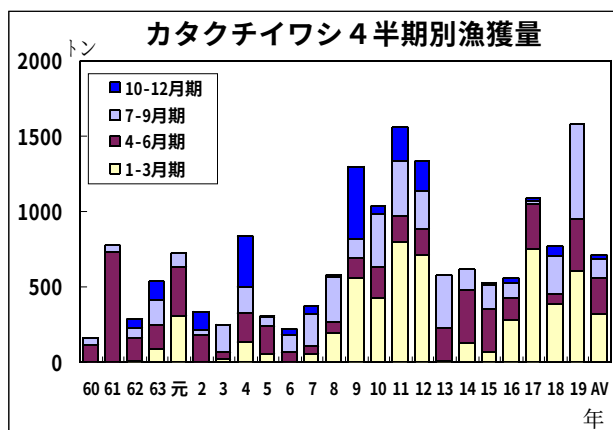
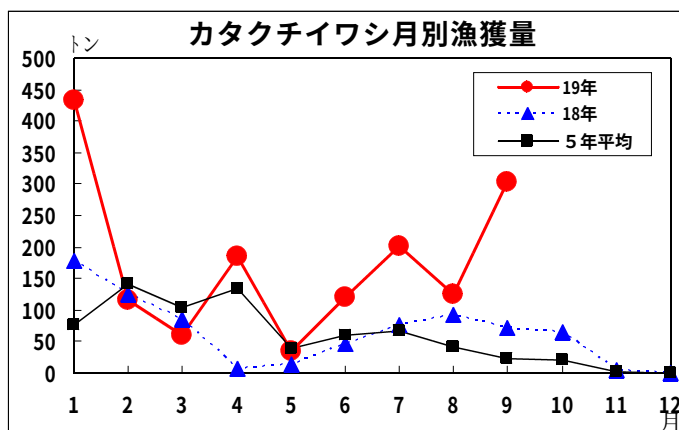


図 カタクチイワシまき網獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年9月26日までの水揚げ量を使用。

【その他の魚種】

〈ムロアジ類（4港計）〉

1. 経年変化及び平成19年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに減少傾向を示し、平成12年は、昭和58年以降最低の1,819トンとなりました。平成13年、14年は一端増加に転じましたが、その後は減少し平成17年は1,675トンとなりました。平成18年は若干増加し2,271トンとなりました。

平成19年7～9月は、薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ、青ムロ）主体の漁獲があり、期全体では309トンの水揚げで、前年の54%及び平年の71%でした。

2. 平成19年10～12月期の見とおし

漁獲の主体はクサヤモロ（銀ムロ、青ムロ）で、薩南海域に漁場が形成されるでしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

〈オアカムロ（4港計）〉

1. 経年変化及び平成19年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに減少し、平成6年には1,823トンとなりましたが、その後は増加傾向となり、平成10年は3,413トンでした。その後、減少傾向となり、平成18年は1,184トンとなりました。

平成19年7～9月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では263トンの水揚げで前年の89%及び平年の74%でした。

2. 平成19年10～12月期の見とおし

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

〈マルアジ（アオアジ）（4港計）〉

1. 経年変化及び平成19年7～9月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、平成2年以降低調に推移しましたが、平成7年には1,430トンに増加しましたが、再び減少し平成11年は639トンでした。平成12年以降は増加傾向を示し、平成15年は3,150トンとなりました。平成16年以降は大きく減少し、平成18年は252トンでした。

主に北西薩海域で漁獲があり、期全体では58トンの水揚げで、前年の66%及び平年の45%でした。

2. 平成19年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ小（1歳魚・平成18年生まれ）、マルアジ中・大（2歳以上）で、マルアジ豆（0歳魚・平成19年生まれ）も漁獲されるでしょう。

来遊量は前年を上回り、平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

前期までの漁況経過からマルアジ小（1歳魚・平成18年生まれ）及びマルアジ中（2歳魚・平成17年生まれ）の来遊量は、前年を上回り、平年を下回る水準です。

マルアジ豆（0歳魚）は、9月までの漁況経過から、来遊量は低調であった前年並みで平年を下回るを考えられます。

総合的にみて低調であった前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

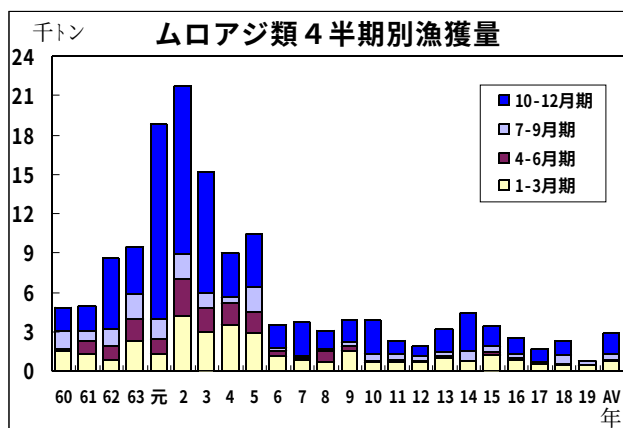
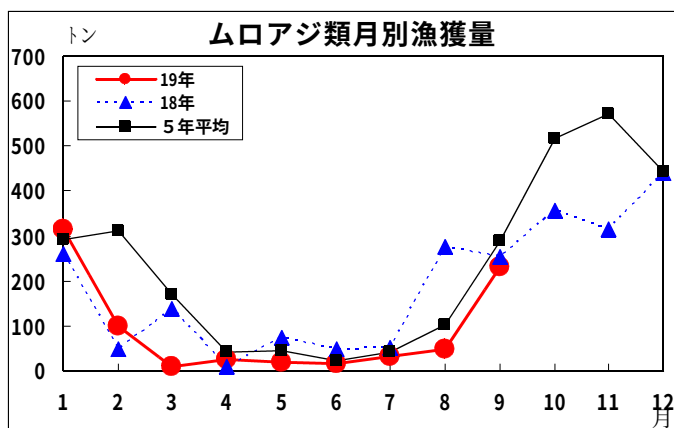


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

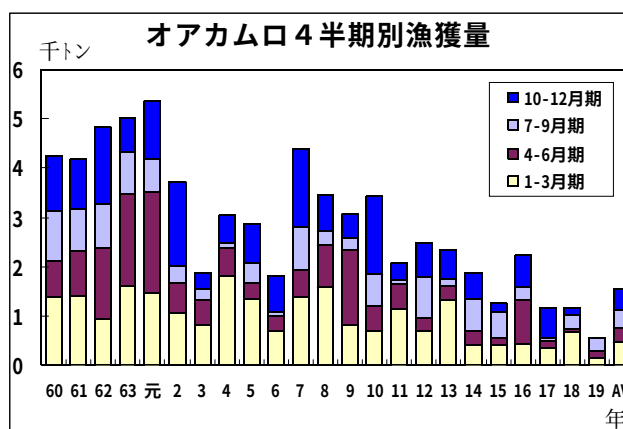
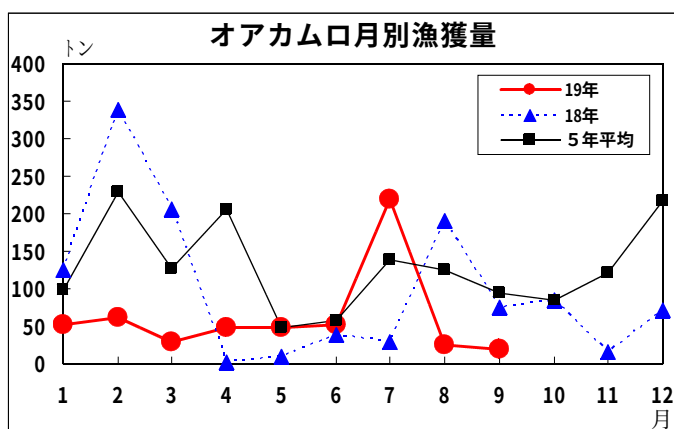


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

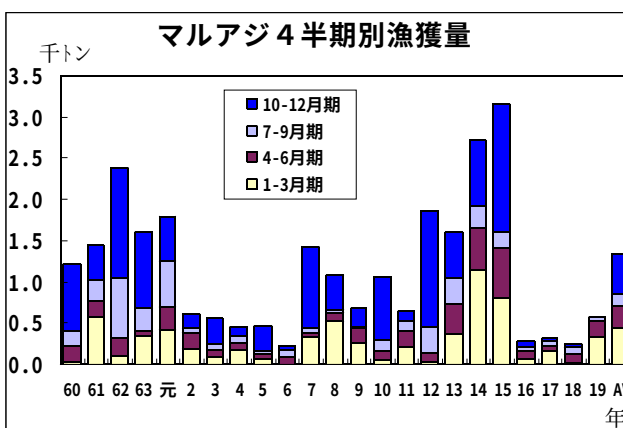
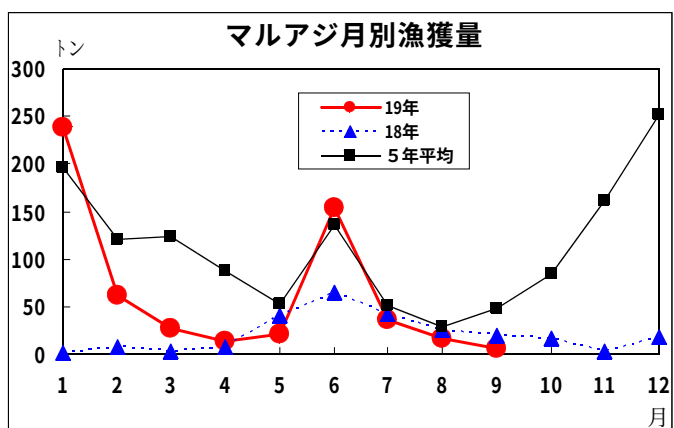


図 マルアジ (アオアジ) まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年9月26日までの水揚量を使用。

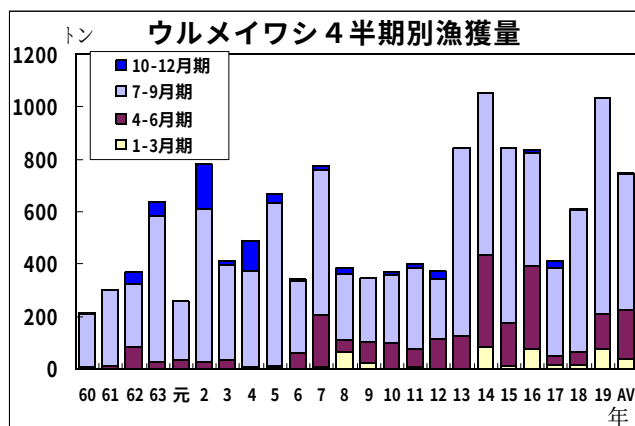
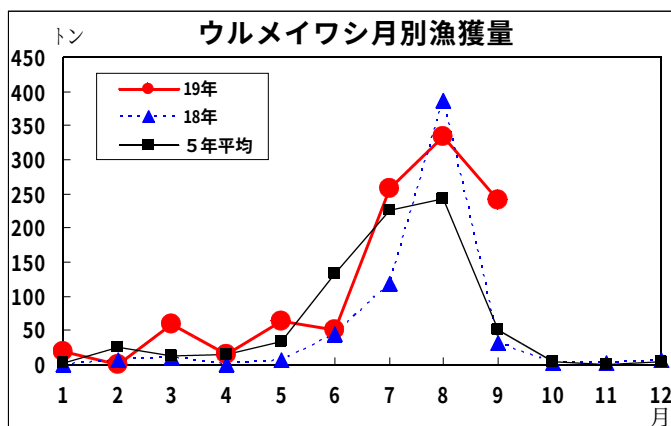


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

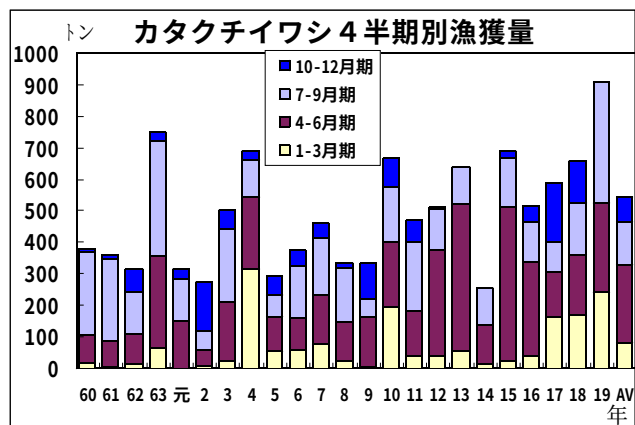
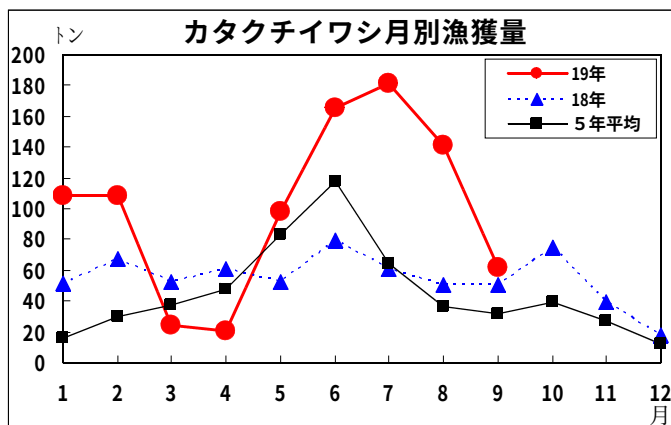


図 カタクチワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

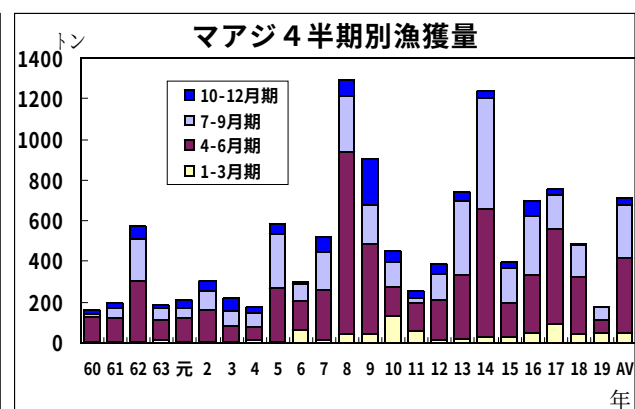
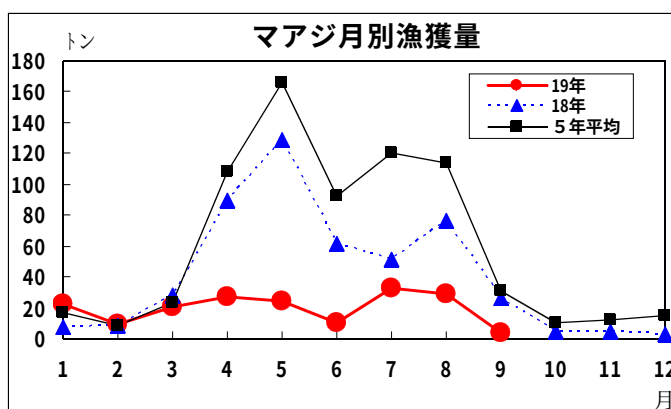


図 マアジ定置網漁獲量変化(内之浦港)

※平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年9月26日までの水揚量を使用。